

『世界の日本語教育』15, 2005 年 11 月

「顔」と «ЛИЦО» —— 顔 概念の日露対照研究 ——

田 中 聡 子*, ケキゼ・タチアナ**

キーワード: 日露対照, 認知言語学, 顔, ЛИЦО, 慣用表現

要 旨

本稿は, 同じ身体部分を表す日本語「顔」とロシア語 «ЛИЦО» とを取り上げ, その用法の重なりとずれを考察し, それぞれと結びついている概念の違いを明らかにしようとするものである。言語は, その言語使用者の世界の捉え方を反映する。しかし, 世界の捉え方・ものの見方は, 母語話者にとっては当然の前提であり, 意識されることがほとんどない。したがって, 異なる言語の比較も辞書的な意味のレベルにとどまるなら, 対象への焦点の当て方, 暗黙の価値判断や期待といった言語の背後にある世界の捉え方の相違を見落としかねない。そこで, この困難な問題に取り組むために, 本稿は異なる言語の母語話者同士の協力という形をとる。

日本語「顔」とロシア語 «ЛИЦО» とは, 身体部分としての意味のほか, 全体を代表するもの(看板やサンプル), 人やモノの個性, 人やモノの側面, 名誉といった多くの用法を共有している。その一方で, 日本語にある 人脈 としての用法はロシア語になく, ロシア語にある 個人そのもの としての用法は日本語にないというように, 重ならない用法もある。

多くの用法で重なり合うように見える両語ではあるが, 子細に検討すると, 焦点化の方向と程度に大きな違いが見られる。日本語「顔」は, 本稿で定義する 立場 の概念との結びつきが顕著である。またそれによって 人脈 の概念との結びつきも説明できる。一方, ロシア語 «ЛИЦО» は, 個性 の概念との結びつきが顕著であり, その方向で種々の派生語も生じている。日本語にない 個人そのもの という用法はその延長線上にある。

要するに, 同じ対象の持つ特徴の中でも, 日本語は他者に向けた表側としての側面に, ロシア語は個人の内的特徴の現れという側面に焦点を当てていると言える。

1. は じ め に

本稿は, 日露の慣用表現¹を比較することにより, 日本語「顔」およびロシア語 «ЛИЦО» (顔)

* TANAKA Satoko: 名古屋外国語大学現代国際学部非常勤講師。

** KEKIDZE Tatiana: 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻助手。

¹ ここでは, 「慣用表現」という語を, いわゆる成句・慣用句とそうでないものとを区別することなく, 慣習化の進んだ自然な表現というゆるやかな定義で用いる。

にそれぞれ結びついている概念の特徴を明らかにすることを目的とする。この二つの語は、辞書のレベルでは、意味的に対応している。ただし、そのことは、それぞれの語に慣習的に結びついている言語使用者の期待や、前提となる世界観までが同じであることを保証するものではない。言語によるコミュニケーションは、言葉の文字通りの意味だけにとどまるものではなく、それぞれの言葉に慣習的に結びついている前提や暗黙の期待までも含むはずである。その意味で、こうした視点からの研究は言語教育にとってきわめて重要であると考えられる。

本稿の拠って立つ基盤は、Lakoff (1987)、Langacker (1987) などの提唱する認知言語学的な言語観である。この言語観によれば、人間の言語とは、言語使用者である人間が世界(の一側面)をあるやり方で解釈し概念化したものを表す記号である。その考え方に立てば、言語が違えば世界の捉え方が異なること、またその異なり方には言語によりある一貫した傾向が見られることが予測される。このような考え方の先駆者としては、言語はその言語話者の考え方を決定していると主張したウォーフがいる。認知言語学でも、言語とその言語使用者の考え方は密接な相互関係にあると考えている。

この考え方を推し進めた結果、言語の意味の研究は、言語の背後にあるそのような概念体系の特徴を明らかにすることにほかならないと我々は考えるに至った。異なる言語の母語話者の共同作業により、言語と結びついた概念の対照研究を行うことは、その有効な方法の一つであると考えられる。母語話者にとっては、自分の身につけた概念体系を反映する母語のデータは、どこをとっても当然と感じられ、一人の母語話者の視点からだけでは問題とすべき点が見えにくいからである。そこで我々は、日本語とロシア語という異なる言語の母語話者として、それぞれ身につけた概念体系を互いに問題点を照らし出す武器として、両言語のデータを分析することにした。本稿は、Kekidze・田中(2004)に続くその試みの一つである。

これに近い試みとして Wierzbicka (1992) がある。Wierzbicka は、いくつかの言語(英語、ロシア語、ポーランド語など)を取り上げ、その違いと共通点を通じて言語に現れるそれぞれの文化の特徴を明らかにしようとしている。その分析は洞察に富んでおり教えられるところがきわめて大きい。しかし、その分析が目指す目標は、個々の表現の意味をいわば概念プリミティブの組み合わせである 'a universal set of human concepts' へと還元することとなっている。Wierzbicka は、この普遍的な単位であるプリミティブの組み合わせですべての言語の多様性が捉えきれると考えている。この方法は一種の成分分析であり、程度問題は扱えない。しかし、実際には言語の問題のほとんどは程度問題であり、言語による相違も、同じ対象物について言えば、どの側面を、またどの程度の強さで焦点化するかに依存していると考えられる。そうした面を排除するようなやり方は言語分析の方法としては適切ではないと我々は考える。

日本語と他言語との対照研究の分野で、身体部位語を含む慣用表現を取り上げたものがこれまでもないわけではないが、筆者らが見た限りでは、言語形式とその辞書的な意味(文字通りのあ

るいは慣用的な意味)を扱うにとどまっており、背景的な概念の特徴にまでは踏み込んでいない。しかし辞書的な意味を見ているだけでは、母語話者が身につけているものの見方という側面を見落としたまま処理されてしまいかねない。

本稿では、まず日本語「顔」² およびロシア語 «лицо» (顔)の表す概念をおおまかに分類し、両者がいかに対応しているかを確認する。次にこの両表現の対応しない用法を見る。最後に、対応していると思われる用法についてももう少し詳細に検討し、その背景の違いを明らかにする。また対応しない用法についても、その中で言及する。

2. 「顔」および «лицо» の用法の比較

2-1. 日露で対応する用法

日本語の「顔」は、それと本来的に結びついている身体部分の概念だけでなく、関連するさまざまな概念を喚起する。つまり「顔」の意味とは、身体部分の概念を核として構成される概念ネットワークにほかならない。同じことが、「顔」と同じ身体部分を表すロシア語の «лицо» (顔)についても言える。日露のこの二つの表現にそれぞれ結びついた概念ネットワークがいかに重なり合うかをまず見ていきたい。

2-1-1. 「顔」と «лицо» の表す基本的概念

日本語「顔」とロシア語 «лицо» は、同一の身体部分を表す表現であるが、この基本的な概念の内には 容貌 や 表情 の概念も含まれている。以下にそれぞれの例を挙げる³。

- (1) 「きれいな顔」, 「暗い顔・うれしい顔・憂い顔・得意顔」, 「顔なじみ」, 「顔見知り」, 「顔に書いてある」, 「(怒りが)顔に出る」
- (2) красивое лицо (きれいな顔) , радостное лицо (うれしい顔) , грустное лицо (悲しい顔) , знать в лицо (顔を知っている) , на лице написано (顔に書いてある)

2-1-2. 全体を代表する部分: “看板”, “指標”

個人を識別する最も有効な身体部分としての顔は、個人の身体の代表であると言える。そこか

² 「顔」には「めん」や「つら」といった類義語があるが、問題の身体部位を表す表現としては周辺のものにすぎない。それについては本稿の分析対象とはしないが、注で多少の言及を行う。

³ 本稿の例文について、インターネットや書籍からの実例はその出典を示す。ただし、文脈を要しない慣用的な表現についてはそのかぎりではない。インターネットからの用例はすべて2003年11月1日～11月30日の間のものである。ロシア語の例文については括弧内に大意を示す。また必要に応じて直訳を添えることもある。

ら考えると、「顔」と «лицо» が、ある存在物を代表する部分の概念を表すのは意外ではない。代表的な部分という場合、全体の内の特により面を示す“看板”としてのケースと、全体を評価するためのサンプルあるいは“指標”としてのケースがある。そのいずれにおいても日露双方にこの用法が見られる。まず、よい面としての代表、いわば“看板”を表す用法の日露双方の実例を以下に挙げる。

- (3) 広島の「顔」になる名所・名物の紹介ページ。

<<http://member.nifty.ne.jp/f-page/hiro/face/hr-face2.html>>

- (4) Гергий Саная был «лицом» популярной в Грузии телекомпании, его, можно сказать, знал каждый... (ゲオルギ・サナヤはグルジアで人気のテレビ局の「顔」だった。彼のことを誰でも知っていたと言えるだろう。)

<www.smi.ru/text/01/07/27/99282.html>

次は、サンプルあるいは“指標”としての用法である。

- (5) その会社の「お客様相談室」や「サービスセンター」の対応を見れば、その会社がどのような会社であるか良く分かる、と言っても過言ではない。私達にとってはまさにその会社を代表する顔なのである。

<<http://www2.tomato.ne.jp/~shin/column/kao.htm>>

- (6) Лицо любого завода — это его продукция. (製品は工場の顔である)

<www.elr.ru/news/articles/2001-06-14.html>

2-1-3. 人・モノの 個性

人間の身体部分・顔が個人のもつ特徴を最も顕著に示す部分であるところから、「顔」と «лицо» には、共通した用法として、個人(個体)の持つ特徴、つまり 個性 を表す用法が生じている。以下にそれぞれの実例を挙げる。

- (7) a. 日本の経済成長を担ってきた「オヤジ世代」が、こと「会社」と切り離して個人にしてみると、「顔」のない、「でくのぼー」ばかりだと知ると愕然とします。

<<http://www.zorro-me.com/miyazaki4/fanletters/shitugyou01.html>>

- b. 沿線で最も顔のない江田駅を顔のある街にしたい

<http://www.city.yokohama.jp/me/aoba/toshi/mati/6_1.html>

- (8) a. (略) безликие студенты, запомнить которых по именам и лицам довольно трудно. (名前と顔を覚えることのなかなかむずかしい、顔のない学生たち。)

<www.moskalyuk.com/movies/jasonx.htm>

- b. создание магазина с собственным лицом (自分の顔を持つお店をすること)
 <www.torgrus.com/management/10/40.html>

2-1-4. 人・モノの 一側面

「顔」と «лицо» には、上で見た集約的な 個性 とは別に、人・モノが持つ多くの側面のうちの単なる一つを表す用法もある。以下にそれぞれの実例を挙げる。

- (9) a. 危険な綱渡りをしながら、表の顔、裏の顔と使い分けつつ歳を重ねてくると、用心深くもなるが、人も悪くなる。(森真沙子『宗湛修羅記』, 祥伝社, 332)
 b. 外国にも知られる「忍者」は、修験者のもう一つの顔でもある。
 (岡裕二『聖徳太子の謎』, 学研 M 文庫, 293)
 c. さまざまな顔を持つ都会
 <<http://www.asahi-mullion.com/mullion/column/toshi/toshitop.html>>
 (10) a. Двуличие Арафата вряд ли поразит тех, кто внимательно следил за ним в течение его 40-летней карьеры международного террориста。(アラファトが二つの顔を持っていることは、国際的テロリストとしての 40 年間の彼のキャリアを注意深く見守ってきた人には驚くことではないだろう。)
 <<http://www.sem40.ru/warandpeace/farah/3552/>>
 b. Два лица одной войны (一つの戦争の二つの顔)
 <www.inguk.ru/biblio/shesh-big/dmitrienko-dva.html>
 c. Многоликий Лондон (複数の顔を持つロンドン)
 <www.tours.ru/country/stories.asp?id_stories=2562&id_country=GB>

例 (10)a. と (10)b. にはいくらか意味の違いがある。два (二つ) と лицо という二つの単語からなる複合語である двуличие (二つの顔を持つこと) という表現は、マイナス評価を帯びた「裏表があること」という意味を表している。一方、複合語ではない два лица (二つの顔) という表現は「二つの側面」という中立的な意味を表しており、例 (10)c. の「複数の顔」とつながっている。

2-1-5. 名譽

「顔」と «лицо» はどちらも、おおまかに言って 名譽 と呼べるような概念と結びついている⁴。以下はその日露双方の実例である。

⁴ 「顔向けできない」などの「顔」は身体部分としての概念を焦点化しているが、同時に「名譽」としての概念も含まれており、この用法への中間例と考えられる。

- (11) a. 学部一期生として、出身大学の顔に泥をぬらないようにがんばっていきたいと思います。
 <<http://www.naruto-u.ac.jp/~sport/jugyo/spjo/2002/re1/report1contents.html>>
- b. まあ、今さらジタバタしても仕方がないし、プロの端くれであるのは確かなので、指名してくれた榊氏の顔を潰さぬよう、生徒のみんなに損をさせぬよう、葛西ならではの講義をしなければ。
 <http://homepage1.nifty.com/kasai_s/diary/0212-01.htm>
- (12) a. Северские кикбоксеры не ударили в грязь лицом. (セヴェルスク市のキックボクサーたちは試合でいい結果を出した。直訳: セヴェルスク市のキックボクサーたちは顔を泥にぶつかなかった。)
 <smi.kuban.info/topic/article/28686>
- b. Надо заметить, что мы тоже могли оказаться среди тех, кто минует по этому показателю. Да выручил Ненецкий автономный округ, чьи 10,5 процента роста промышленного производства позволили области в целом хоть как-то сохранить свое лицо. (我々もこの指数ではマイナスを出してしまう恐れがあった。しかし、ネネツキー自治体の産業発展率が 10.5 パーセントだったおかげで、州全体の顔をкаろうじて保つことができた。)
 <<http://pravdasevera.ru/2003/03/18/4.shtml>>

2-2. 日露で対応しない用法

以上に見てきたように、同じ身体部分を表す「顔」と«лицо»とは多くの用法を共通して持っている。つまりそれぞれの語と結びついている概念ネットワークはかなりの部分が重なり合っている。しかし、当然ながら、両語で一致しない用法も存在する。

2-2-1. ロシア語にない日本語の用法: 人脈

日本語の「顔」には、「顔役」、「顔が利く」、「なかなかの顔・いい顔である」、「顔パス」などの慣用表現がある。ここでは「顔」は 人脈 (影響力あるいはコネ) といった概念を表す。交際範囲の広いことを表す「顔が広い」における「顔」も 人脈 という概念につながるものとしてここに分類できる。これはロシア語には見られない用法である。

- (13) 産業界に顔が利く有名な大学の先生
 <<http://www.asahi-net.or.jp/~ac3n-hsn/TLO.html>>

- (14) どうもフランソワという男、このホテルではなかなかの「顔」のようだ。

<http://www5.justnet.ne.jp/~shigepero/raigyo/tabi2_2.htm>

- (15) かれは、(略)得体のしれない凄みのある男である。そして日本語もペラペラだ。そしてやたらに顔が広く、アメリカ大使館にも有力なコネがあるようだ。

(田中光二『鋼鉄海峡』、徳間文庫、364頁)

2-2-2. 日本語にないロシア語の用法: 個人そのもの

人々がお互いを認識する上で、顔は人体の中で一番顕著な部分である。その心理的事実に基づいて、ロシア語の «лицо» は個人全体を、つまり 個人そのもの を表すことがある。次はその例である。

- (16) a. частное лицо (私人・直訳: 私的な顔)
 b. официальное лицо (公人・直訳: 公的な顔)
 c. третье лицо (第三者・直訳: 第三の顔)

«лицо» (顔)はさらに次の例文のように一人の人間に見立てて団体全体を表すこともある。

- (17) юридическое лицо (法人・直訳: 法的な顔)

個人(団体)全体を表す «лицо» の用法は、先に見た日本語とも共通する 代表 としての用法とは別の、独自の用法として分類できる。なぜなら、代表 としての用法では 部分 / 全体関係 の概念が顕著であり、全体 概念を背景として、それに依存して 部分 の概念が成り立っているのに対して、ここで取り上げた 個人そのもの とする用法では、部分 / 全体関係 の概念も背景となる 全体 の概念も捨象され、もっぱら 顔 = 個人 という結果だけが残っているからである。これは日本語にはない用法である。

3. 「顔」と «лицо» の概念的相違

上で見てきたように、顔と «лицо» はその意味拡張においてかなりの重なりが見られる。これは、人間の身体部位としての顔が、本質的には人類にとって共通の意義を持つものとして捉えられていることを示す。しかしそのような存在物であっても、どこに焦点を置いて捉えるかは言語によって異なると思われる。

まず日本語から見ていこう。先に、日露で共通した用法として 名誉 に関わる用法を挙げたが、ロシア語ではこの用法はそれほど大きな割合を占めていないのに対し、日本語では重要な位置を占めている。「顔を立てる・顔が立つ」、「顔を潰す・顔が潰れる」という慣用表現は、日常多

用される重要な表現であり、その中の「顔」の概念には、日本語を支える概念体系の特徴、日本語話者による世界の捉え方の特徴が顕著に現れていると考えられる⁵。

ここでの「顔」の概念を考えるうえで重要と思われるのは「立場」の概念である。「立場」という語は多義的であるが、その中核にあるのは「さまざまな人間関係の中で個人(または集団)が占める位置」という意味であろう⁶。例えば、先輩・後輩、上司・部下、プロ・アマなどの固定した立場もあれば、争いの仲裁者のような一時的な立場もある。また「地位」と置き換えうる公的な立場もあれば、親族名で呼びうるような個人的な立場もある。さらには、偶然知人を見つけて手を振ったが気づいてもらえなかった人の立場のような、名づけようのない立場もある。ここで注目すべき点は、日本語の「立場」概念が、しばしば社会通念によって決まった一定の名誉や権利を伴うものとして捉えられていることである。「立場がない」という慣用表現はまさに、そうした名誉や権利が保たれない事態を表している。「顔」と結びついているのはこのような「立場」概念である。「顔を立てる・潰す」などの慣用表現は、このような「立場」概念を背景として考えるとよく理解できる。

次に挙げるのは、「立場がない」と「顔を潰される」との概念上の密接な関係が確認できる例である。

- (18) たかが14歳の子供に真実を指摘された。これでは、大人達の立場が無い。完全に顔を潰された発令所の面々は、誰も何も言おうとはしなかった。

<http://www.iris.dti.ne.jp/~gbd03542/ss/ss23_15.html>

ここで「大人達の立場が無い」とは、大人としての名誉や権利が保たれないことであり、それは、子供に「真実を指摘」され、大人が「顔を潰された」結果である。つまり大人の「顔を潰す」とは、大人対子供という人間関係において、大人の占める「立場」に当然伴うとされる名誉や権利が保たれなくなるような行動を取ること、として理解される。その逆に、大人の「立場」の名誉や権利を尊重するような行動をとること(例えば知っていても口に出さないなど)は、大人の「顔を立てる」ことになる。

一定の名誉や権利を伴う「立場」の概念は、公的な上下関係の中で個人や集団が占める位置において特に最も明白であろう。例えば次の例には、町民に対する「町会長」、本庁に対する「所轄

⁵ 日本人向けの代表的な国語辞典『広辞苑』(第5版)は、「顔を立てる」を「その人の面目が立つようにする。名誉を保てるようにする」と説明し、「顔を潰す」を「面目を失わせる。名誉を傷つける」と説明している。同辞書によれば「面目」とは「世間に対する名誉」である。そこで「顔を立てる」は「世間に対する名誉」を保てるようにすること、「顔を潰す」はそれを失わせることになる。しかし「世間に対する名誉」という説明は日本語母語話者の直観に依存したものであり、通言語的なレベルでは、その直観の分析こそが必要になる。本稿では、一連の慣用表現の中の「顔」と重なり合う「面目」の意味を、本稿で定義する「立場」というものに内在する名誉として解釈する。

⁶ このほかにも、例えば、「立場を表明する」に見るように「意見」の意味もあり、また「近代医学の立場」のように「観点」の意味もある。

署」といった公的な 立場 への言及がある。

- (19) 町内での商いの規模は、建築会社、肛門科の病院に継ぐ三番手だったが、祭りの寄付の額は町会長の蕎麦屋の顔を立^てて、四番手になるように心がけていた。

<http://www.mycom.co.jp/tokidoki/shonen/http://partners.dhw.co.jp/html_mail/newslink/0821/020821sugiyama.html>

- (20) 「(略)とっくに解決した一年以上も前の事件をほじくりかえして所轄の顔を^{ママ}つづすような真似は……」(黒川博行『てとろどときしん』, 講談社文庫, 30)

ここで問題になっているのは、明らかに、社会通念上その 立場 に伴うとされる何らかの名誉や権利を尊重する行動を取ることである。そうしなければ問題の 立場 にいる個人や集団は「立場がない」ことになる。

しかし 立場 が問題となるのは、何も公的な関係においてだけではない。日常生活で生じる特に決まった名前もないような個人的な関係においても、このような 立場 が重要な役割を果たしている。例えば次の例では、他の従業員に対する仲介役的な従業員の「立場」、また交際の申し込みをする女性の当の相手に対する「立場」という、一時的で希薄な関係における曖昧な「立場」が問題になっている。

- (21) 店にいと次々コーラのお代わりをせがまれる。仲の良い女の子はただ横に座って話をするだけだが、別の女の子やボーイたちが次々回ってくるのだ。さすがに全員におごるわけではないが、あまりにケチるのも彼女の顔を潰しそうで気を使う。

<<http://www.tebichi.com/tebichi/clms/s001mt/clms/0005.html>>

- (22) 「中川さん、付き合ってくれる?」/ ぼくは、ちょっと考えた。この場で断ると小百合の顔を潰しそうだなと。

<http://vote.news.msn.co.jp/default.asp?theme_id=fxNRtl1RI&offset=39>

ここでも「顔を潰す」こと、相手の 立場 を失わせることは、避けるべきこととして捉えられている。公的な 立場 とは異なり、こうした日常生活の中で生じる上下関係の曖昧な一時的な関係における 立場 は、それに伴う名誉や権利といっても、その内容も範囲も明確にはできない。しかしそれでもなお、何らかの尊重すべき名誉や権利が暗黙に認められていると考えなくてはならない。そうでなければ、ここに見られるように、問題の人物の「顔を潰す」ことを気にする必要はないからである。

ここで重要なのは、一人の個人に直接帰属する名誉ではなく、社会通念上の 立場 に伴う名誉や権利が問題になっているという点である。立場 はそれを占める具体的な個人や集団を捨象して考えることのできる概念である。したがってここには最初から形骸化へ向かう可能性が含ま

れていると言えよう。実際、立場を占める個人や集団にとって実質的に意味がなくても、形式だけ、建前だけで立場の名誉や権利を尊重することが可能になるのは、別に珍しいケースではない。次はそのような例である。

- (23) 問題はあいさつ好きの上司が一人いたこと。思案の末、彼には乾杯の音頭をとってもらうことで顔を立て、あいさつ時間を最小限にとどめることに成功した。

<http://chubu.yomiuri.co.jp/sykai1/woman_job020827.html>

- (24) 特区3次提案で、いちおうNPO学校と特区学校法人の抜け道ができました。(略)
特区で出てきた条文は、文科省の顔を立てながら、抜け道を作ったものです。

<<http://www.freeml.com/message/diversity@freeml.com/0001735>>

このように、「顔を立てる・潰す」という慣用表現における顔概念は、社会通念上一定の名誉や権利を伴うとされる立場として、より特定的にはその名誉や権利そのものとして説明できる。日常多用される慣用表現の中で、人体の最も顕著な部分・顔が立場と結びついているということは、日本語話者にとっては個人の最も重要な側面が立場であることを暗示している。確かにロシア語にも、「сохранить лицо」(顔を保つ)、「потерять лицо」(顔を失う)という慣用表現があるが、これが名誉に関わる意味を表すのは、例えば新聞の政治・経済面で用いられるような形式張った表現においてであり、日常の会話で用いられるときは、この後で見るように、名誉ではなく個性に関わる意味で用いられることがほとんどである(後の例(28)、(29)参照)。

またロシア語に見られない人脈としての「顔」の用法でも、この立場という概念が重要であると思われる。「顔パスで入る」、「誰かの顔が利く」などの状況を支えるのは、顔の持ち主である人物の立場に伴う名誉や権利を尊重すること、つまり「顔を立てる」ことが暗黙のルールとして要請されているからである。そうしないとその人物の「顔を潰す」ことになる。コネあるいは人脈がモノを言うという点だけを見れば、日本もロシアも同じであると言えるかもしれないが、その背景は必ずしも同じであるとは言えない。今見てきたように、日本語社会においては立場重視の価値観が背景にあり、「顔」は人脈の概念と結びついている。しかしロシア語«лицо»には人脈を表す用法が無い。このことは、この身体部分の概念がどの言語にとっても人脈概念と結びつくようなものであるとは言えないことを示している。

今度はロシア語の«лицо»を考えてみよう。この語の特に重要な用法は、ある個人に特有の性質、つまり人の個性を表す用法である。まず、次は日本語とも共通する用法である。

- (25) безликие студенты, запомнить которых по именам и лицам довольно трудно.

(例文(8)a.を再掲)(名前と顔を覚えることのなかなかむずかしい、顔のない学生たち。)

日本語でも、特に「顔のない」あるいは「顔を持たない」という文脈でこの意味を表すことがあるが、日本語ではこの用法はそれほど目立つものではない。個性としての用法は、ロシア語 «лицо» の方が日本語「顔」よりもはるかに顕著である。「лицо» は次のように、さまざまな文脈で 個性 を表す。

- (26) поиски своего лица 自分の顔の追求(自分の個性の追求)
- (27) Остап Шутко — скрипач с собственным артистическим лицом.
 <www.ibn.ru/Detailed/42558.shtml>
 (オスタプ・シュトコは、自分の芸術的な顔を持ったバイオリニストである。)
- (28) (из интервью с дирижером) — А как же записи?
 — Это химия. Там почти все оркестры мира звучат одинаково.
 — Вы мало записываетесь — пытаетесь противостоять конвейеру?
 — Просто хочу сохранить свое лицо.
 <<http://www.sem40.ru/famous2/m1285.shtml>>
 ((ある指揮者とのインタビュー) 録音は? —これは化学です。録音されれば世界のすべてのオーケストラは同じように聞こえるんです。あなたがあまり録音しないのは、ベルトコンベアーに対抗しようとしているからなんですか? ただ自分の顔を保ちたいんです。)
- (29) Сад, который не прячет в густой зелени какие-либо оригинальные вещицы, может потерять свое лицо и слиться с сотней других своих собратьев.
 <www.landshaft.ru/pub.asp?pub_id=63&article_id=704>
 (生い茂った緑の中で何らかのオリジナルな(独創的な)ものを秘めていない庭は、自分の顔を失い、多くの他の庭と区別つかなくなる恐れがある。)

最後の二例は、直訳すれば「顔を保つ・顔を失う」ということになる表現が、日本語から予想される結果とは違って、一般には「個性を保つ・失う」という意味に用いられることを示している。

さらに、「лицо」と 個性 の結びつきの強さを示す言語事実として、この概念に関わる使用頻度の高い派生語の存在が挙げられる。その一つが «личность» («лицо» に抽象名詞を表す語尾 «-ность» が付いたもの)という語で、これは特にある人の世界観や価値観の総体を表す。上で見た例では、「лицо» は特に他人との違いに着目した明らかな特徴という意味での 個性 を表していたが、この派生語はより内面的な 個性、その人なりの考え方・価値観という意味での 個性 を表す。個人の人格とも言い換えられるような 個性 である。

- (30) уважать чужую личность. (人の人格を尊重する。)

この「личность」という語はまた、このような個性・人格という意味から、それを備えた「人物」という意味へと拡張している。

(31) Обаятельная личность (魅力的な人)

(32) Быть толпой или остаться личностью?

<pravdasevera.ru/2001/08/10/14.shtml>

(個性のない群衆の一人になるのか、それとも自分の顔を持った人になるのか?)

個性はある個人に特有の性質であるが、この「ある個人に特有」という側面が焦点化されて、「лицо」という語から「その人に特有の、個人の、個人的な」という意味を表す «личный» という形容詞も派生している。

(33) Личная библиотека (個人の蔵書)

(34) Личная ответственность (個人の責任)

(35) Личная жизнь (私生活)

(36) Личные отношения (個人的な関係)

またこの形容詞からは、さらに「自分自身で」という意味を表す «лично» という副詞が派生している。

(37) Министр здравоохранения лично проверит аптеки Киева.

<www.korrespondent.net/main/85103~50k>

(保健大臣は自分自身でキエフの薬局を監査する。)

(38) Вы знакомы с ним лично? (あなたは彼と直接的にお知り合いですか?)

このようにロシア語の «лицо» は 個性 や 個人の人格 を表す意味で広く用いられ、またそれと関連する意味を表す使用頻度の高い派生語をいくつも生み出している。この «лицо» とその派生語である «личность», «личный», «лично» とのつながりは、現代ロシア語において透明である。つまり身体部分としての 顔 の概念と 個性 の概念とは、現代ロシア語話者にとっては明らかに連続したものとして捉えられている。これを日本語の「顔」と比較すると、それぞれの背景の違いは明らかである。日本語では他人を尊重することはとりもなおさずその 立場 を尊重することであると言えるのに対し、ロシア語では他人の人格つまり内面的特性が問題にされる。つまり 顔 と «лицо» はそれぞれ、両言語の共同体において重視される個人の側面と結びついている。

ロシア語の «лицо» が 個性 あるいは個人の人格と強く結びついているところから、そのような 個性 を備えた人物へと、この語の意味が拡張するのは自然な流れである。先に 2-2-2.

で見た日本語にない用法、つまり個人そのものを表す用法は、この流れの延長線上にあると考えられる。ある事物の概念からそれと密接な関係にある別の事物の概念へと（例えば作者から作品へと）意識が導かれること、あるいは同じ事象のうちのある側面から別の側面へと（例えば原因から結果へと）焦点が移動することは、人間の認識の一般的なあり方であり、その反映としての言語現象は広く知られている。

4. 結 論

顔は人間の身体中最も顕著な部分であり、それゆえ個人を代表するシンボルとも言える身体部分であるが、それが持つどの側面に特に焦点が当てられているかは、以上に見てきたように、日本語とロシア語とでは異なっている。その焦点化されている側面こそが、それぞれの言語共同体の最も重視する側面であると考えてよいであろう。

日本語「顔」は、特に 名誉 と、それも個人の人格とは無関係な 立場 に伴う名誉と強く結びついている。一方、ロシア語 «лицо» は、個人の人格面とより強く結びついている。例えば、日本語に直訳すれば「顔を保つ・失う」などとなるロシア語の表現は、日本語とは違って、主として人の 個性 に関わる表現である。日本語では他人を尊重することはとりもなおさずその 立場 を尊重することであると言えるのに対し、ロシア語では他人の人格つまり内面的特性が問題にされる。同じ身体部分・顔の持つ特徴のうち、前者は他者に向けた表側としての側面、後者は個人の内的特徴の現れという側面に焦点を当てていることがわかる。

日本もロシアも、ある意味でコネあるいは人脈がモノを言う社会であると言えるだろう。しかしそれを支える基盤は必ずしも同じであるとは言えない。日本語社会の場合、上で見てきたように、 立場 重視の価値観が背景にある。人の外的側面としての顔がこの 立場 と結びつき、それを通して 人脈 と結びついた結果、日本語「顔」には 人脈 を表す用法が生じている。一方、ロシア語 «лицо» には 人脈 を表す用法が無い。このことは、顔という身体部分の概念が、ロシア語話者にとっては、 人脈 概念と結びつくようなものではないこと、あるいは、人脈の基盤となりうるほど 立場 が重要視されていないことを暗示している。ロシア語社会において人脈の基盤となるものについては、稿を改めて論じる予定である。

参 考 文 献

- ウォーフ, B. L. 池上嘉彦訳 (2001) 『言語・思考・現実』, 講談社学術文庫参考。
Kekidze Tatiana, 田中聡子 (2004) 「日露慣用表現に見る身体と精神の捉え方」『言語文化論集』第 25 巻 第 2 号, pp. 55-83, 名古屋大学国際言語文化研究科。
Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous things*, Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作ほか訳 (1993) 『認知意味論』, 大修館書店。)

- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1. Stanford: Stanford University Press.
- Wierzbicka, Anna. (1992) *Semantics, culture, and cognition: Universal human concepts in culture-specific configurations*, New-York: Oxford University Press.